

令和5年度 第4回藤沢市部活動地域移行推進協議会 会議録

1 開催日時

2023年12月22日（金） 15時～17時

2 開催場所

市役所本庁舎7階 会議室7-1・7-2

3 委員および出席者

【委員】

	氏 名	所 属	出 欠
1	東海林 祐子	慶應義塾大学総合政策学部兼大学院 政策・メディア研究科	出 席
2	川邊 保孝	東海大学 スポーツプロモーションセンター	出 席
3	ハッ橋 博美	藤沢市文化団体連合会	出 席
4	林 良雄	藤沢市体育協会	出 席
5	谷口 三千也	藤沢市スポーツ少年団	出 席
6	太田 修二	藤沢市民交響楽団	出 席
7	大井 秀幸	藤沢市学校・家庭・地域連携推進協議会長会	出 席
8	越 美紀	藤沢の子どもたちのためにつながる会	出 席
9	福家 大輔	藤沢の子どもたちのためにつながる会	出 席
10	櫻井 光	特定非営利活動法人藤沢市民活動推進機構	出 席
11	神原 勇人	藤沢市みらい創造財団	出 席
12	加瀬 良一	御所見小学校	出 席
13	笹原 信吾	滝の沢中学校	欠 席
14	亀山 憲生	村岡中学校	出 席

15	坪谷 麻貴	湘洋中学校	出 席
16	岸 寛人	藤沢市中学校体育連盟	出 席
17	中村 亮平	村岡中学校（藤沢市教職員組合）	出 席

【運営委員】

	氏 名	所 属	役 職	出 欠
1	谷村 朋	市民自治推進課	課長補佐	出 席
2	浅上 修嗣	生涯学習総務課	主幹	出 席
3	森本 琢実	文化芸術課	課長補佐	出 席
4	三部 梨加子	スポーツ推進課	課長補佐	出 席

【事務局】

	氏 名	所 属
1	峯 浩太郎	藤沢市教育委員会 教育部長
2	近 尚昭	藤沢市教育委員会 教育部 参事
3	丸谷 英之	藤沢市教育委員会 教育指導課長
4	野口 博史	藤沢市教育委員会 教育指導課 指導主事

4 会議録

1. 開会挨拶(会長)
2. 第3回藤沢市部活動地域移行推進協議会 会議録(案)
3. 報告「3つのモデル実証の途中経過と、拠点校型を進めるにあたっての現状について」
4. 各検討専門部会からの報告及び協議

【共通協議テーマ】:モデル実証の成果と課題から、拠点校型学校部活動が持続可能な
スポーツ・文化芸術環境の土台となるためには」

- ①地域指導団体検討専門部会
- ②指導者の質と研修に関する検討専門部会
- ③大会運営検討専門部会
- ④諸条件検討専門部会から

5. 事務連絡

6. 閉会挨拶(副会長)

【当日の記録】

事務局：皆様こんにちは。本日はお忙しい中、第4回藤沢市部活動地域移行推進協議会にご出席くださりありがとうございます。私は、本日事務局として進行を務めます、藤沢市教育委員会教育指導課の野口と申します。よろしくお願いいたします。

まず、資料の確認をいたします。①本日の次第、②「第3回藤沢市部活動地域移行推進協議会資料」、の2点です。資料の過不足等ございませんでしょうか。それでは、本日の進行を次第に沿って進めてまいりますのでよろしくお願いいたします。

なお、藤沢市審議会等の会議の公開に関する要綱第4条により、協議の透明性、公正性を確保する意味でも、本協議会を公開で行いたいと思います。協議の内容につきましては、議事録作成の都合上、録音させていただきます。

傍聴の皆様方、お手元の藤沢市の傍聴要領をよくご覧になって、各事項を遵守くださいますようお願いいたします。

それでは、次第の1、東海林会長より開会の挨拶をお願いします。

会 長：こんにちは。本日は終業式とのことで、お忙しいところありがとうございます。本日は大事な議論になると思いますので、皆様の知見をうまく交流ができればと考えております。今日もどうぞよろしくお願いいたします。

事務局：ありがとうございました。では、次第の2、「第3回藤沢市部活動地域移行推進協議会 会議録（案）」に移ります。資料の4ページをご覧ください。

4ページから18ページまで、第3回推進協議会会議録の（案）をお示ししております。恐れ入りますが、ご自身のご発言箇所を確認いただき、何か異なる内容などがございましたら、1月15日頃までに事務局あてお知らせください。どうぞよろしくお願いいたします。ここからの進行は東海林会長にお願いしたいと思います。

会 長：はい。では、報告の部分ですが、まず、最初に前回の協議会の中で、会長預かりになった件があるかと思います。それについて、事務局からご説明いただければと思います。

事務局：大きく2点ご指摘いただいております。1点目が、来年度以降「地域連携」を主軸にするということで、それに合わせた表記にするべきという点、もう1点は、拠点校が開始する計画においても周知期間についてご懸念をいただきましたことから、令和6年度に「予定」という言葉を入れさせていただきました。以上でございます。

会 長：次第の3、報告に移ります。「3つのモデル実証の途中経過と、拠点校型を進めるにあたっての現状について」、事務局から説明をお願いします。

事務局：はい。前回の協議会において、副会長から今年度までモデル実証は、まだ半ばというところであるのに、唐突な拠点校の提案であるように感じるとのご意見をいただきました。その辺りを鑑みまして、今一度、今年度の3

つのモデル実証の拡充から、学校部活動の拠点校型へ計画の主軸を変更するに至ったこれまでの経緯について、改めてご説明させていただきたいと思います。資料19ページをご覧ください。

今年度当初、休日の活動を地域クラブとして行うモデル実証＝「未来の理想の姿」を3ケース行い、以降6年度は20ケース、7年度は90ケースと数を増やし、最終的に令和8年度からは本市の休日の部活動はすべて地域クラブ活動として行うことを計画していました。

しかしながら、3つのモデル実証に着手したところ、成果が十分認められる一方、その手法によるすべての休日の部活動を地域移行していく計画の実現には、時間、コスト、労力の面から無理があることがわかりました。

そこで、「部員数の減少」と「指導者確保」の課題解消のための手段として「拠点校型学校部活動」を提案しました。

顧問の教員にはもうしばらく負担をかけてしまいますが、拠点校型学校部活動、または現在の部活動に地域人材や地域指導団体を配置できるよう、みらい創造財団に指導者配置に係る業務を委託し、学校部活動へ地域人材を配置する取組を来年度から試行で始める計画を立てました。

地域移行については、その効果と課題、進捗について検証し、改善しながら進めていくと国からも示されております。

本市においてもこの仕組みづくりを進めながら都度検証・改革し、できるところから、部活動指導員や外部指導者等の効果的な配置など、地域人材を配置することで休日の指導から顧問教員を外していく整備をしていきたいと考えております。

ではここで、先ほど申し上げた「3つのモデル実証の成果と課題」は何かを明らかにすることと、その成果と課題がどのように拠点校型につながっていくのかを、委員の皆様とともに検証していきたいと思います。

地域移行というハードが整わなくても、ソフトの面を拠点校型で整えていけたらと考えております。

また、現在実証を行っているケースで示すエビデンスが、拠点校型をより円滑に進めるための肉付けにもなると考えました。それでは、滝の沢中学校と高浜中学校で行っているモデル実証の、第1回のアンケート結果と、その分析をご説明いたします。

資料の20ページをご覧ください。今年度予定していた3つのモデル実証について、図にお示ししているような形で取り組んでおります。

なお、第2回推進協議会で報告いたしましたが、湘南台中学校吹奏楽部につきましては、運営主体を担っていただく想定でございました保護者会から最終合意が得られなかったため、実施しておりません。

4月からモデル実証がスタートしている滝の沢中学校陸上競技部と高浜中学校サッカー部について、7月に1回目のアンケート調査を行いましたので、主な回答と事務局の分析をご説明いたします。

アンケート調査は「教員の負担軽減」につながっているかどうかという視点と、充実した指導を受けられているかという視点からアンケートをグ

ーグルフォームで作成しました。顧問の教員、生徒、保護者、指導団体、管理運営団体にそれぞれQRコードを端末等で読み込む形で、アンケート調査に任意で協力いただいたものです。

まず、滝の沢中学校の陸上競技部のモデル実証についてですが、休日の部活動を藤沢市みらい創造財団の管理下で、藤沢ACという地域の陸上競技団体が指導を行っています。当該陸上部の顧問の教員も休日の指導を希望しているので、藤沢ACの指導者と一緒に指導にあたっています。

21ページをご覧ください。生徒に、「藤沢ACの指導についてどう思うか」と尋ねたところ、「よい」・「どちらかといえばよい」と答えた割合が100%でした。

その理由として、「的確な指示をしてくれる」、「正しい走り方をわかりやすく教えてくれるから」、「いろんなことを丁寧に教えてくれるから」などが挙げられており、高い専門性に基づいた指導を受けられていることを、生徒が「充実した指導」と捉えていることがわかりました。

次に保護者です。「藤沢ACの指導者が全面的に指導を行い、顧問の教員はともに指導を行う体制を取っていることについて、どう思うか」と尋ねたところ、「よい」・「どちらかといえばよい」と答えた割合が100%でした。その理由として、「充実した指導」の視点で見ると、「外部の方に入っていただくことで、いろいろな視点で指導してもらえる」、「色々な指導者に教われることは、子どもの成長につながるから」、「顧問の専門外の種目も見てもらえる」という意見がありました。「教員の負担軽減」の視点で見ると、「先生の休日が確保されるという点でよいと思う」、「先生の負担を少しでも減らすため」という意見や、「いつも指導してくれる顧問の教員もいるという安心感がある」という意見がありました。先生には少しでも休日は休んでもらいたいという声がある一方、先生も休日の指導に関わってくれと尚のこと安心であるという、意見もありました。また、休日の部活動が地域クラブ活動として行われていることについて、「良い点」と「課題」について尋ねました。「良い点」については、「この先、参加校が増えれば他校の生徒とかかわりをもてる」ことや、「顧問の先生が休みでも、やりたい子はクラブでできるなら良い」、「顧問の先生の負担が少なくなり、部活以外の指導にも時間が使えるようになる」という意見がありました。「課題」としては、地域の指導者に「子どもたちの普段の様子や個性を十分に理解してもらえるのか」、「管理者が変わるなら、指導者間の引き継ぎは必須であることから、平日の業務の中に引き継ぎの時間を取ることは必要なのでは」という意見があり、平日と休日の引継ぎや生徒理解に関する懸念が感じられました。また、「地域委託の団体選びの際は、指導の仕方や、指導する人の選定基準に注意を払ってもらいたい」、「部活を地域に開くことで、多世代と交流できて、多くの経験がえられるのでは」といった、部活動を地域へ開く際のご意見もいただきました。

次に顧問の教員です。22ページをご覧ください。顧問の教員2名は、

地域の指導者とともに指導に当たる体制について、2人とも「よい」と感じており、その理由として「生徒に指導の齟齬が生じない」としています。

また、「教員の負担について」尋ねたところ、2人とも「負担は減っている」と回答しています。その理由として、「陸上競技は種目が多岐にわたるため、自分の専門種目以外を見てもらえるため」と回答しています。

また、休日の部活動が地域クラブ活動として行われていることについて、「良い点」と「課題」について尋ねました。「良い点」として、「地域クラブの活動の中で、小学生との交流もあり、中学生と小学生双方に良い影響がある」としています。「課題」については、「中体連が大会運営をしている現状が今後どうなっていくのか」という懸念と、「部活動に係る金銭面の管理負担」を挙げています。次に指導に当たる藤沢ACです。指導運営面での負担については「どちらかといえば負担ではない」と回答しています。また、教員とともに指導を行う体制について、「どちらかといえばよい」と回答していて、その理由として「顧問教員との円滑なコミュニケーションから、より専門的な指導が行えている」としています。本事業の「良い点」として、「競技をレベルアップしたい生徒に専門的な指導を行えること」と、「教員が休日を取りやすくなること」を挙げています。そして、「課題」については、「中学校のグラウンドが他の部活動との兼ね合いからあまり使用できないこと」と、「予算が少ないことから長期的にみると担い手が少なくなるのではないか」という懸念を挙げていますが、「近隣校との合同クラブで行う」ことで、こうした課題が解消されるのではないかという意見をいただきました。

最後に管理運営団体の公益財団法人藤沢市みらい創造財団です。管理運営の負担について「どちらかといえば負担である」と回答しています。その理由として、試行初年度ということで、事業の全体像がまだまだ手探りの状況であると感じており、今後業務が軌道に乗り、運営体制や環境が整うことで改善していけるのではないかと考えているとのこと。藤沢ACの指導者とともに顧問の教員が指導にあたる体制については、「よい」と回答しています。これは、管理運営団体として総合的に俯瞰したときに、移行の初期段階においては顧問の教員が休日の活動に関わることが生徒や保護者の安心感につながっていると捉えているからだそうです。一つの提案として、時間がかかる方法ではありますが、初期段階に教員も地域クラブ指導者として関わる体制が、安定的なクラブ運営と、理解と協力を促進しながら地域移行していけることにつながるのでは、という意見をいただきました。本事業の「良い点」として、子どもたちの持続可能なスポーツ活動の推進と、スポーツ種目の選択肢の幅が広がることで生徒たちの多様なニーズに沿った活動が可能になること、そして、地域スポーツクラブを運営していく上で、学校施設が利用できるのはとても大きなメリットであると捉えていると、意見をいただきました。今後の「課題」として、既存の団体の指導者は既に土日を中心に活動を行っており、このような部活動の受け皿の指導者を兼務することは難しいことから、新たな指導者の発掘

と養成をしていくシステムの構築が必要と考えているとのことでした。

次に、高浜中学校のサッカー部です。資料の20ページにお戻りください。総合型地域スポーツクラブの一般社団法人ゴールデンアカデミーが、休日のサッカー部の管理運営及び指導にあたっています。顧問の教員は休日の指導を希望していないので、平日はこれまでどおり顧問の教員が、休日はゴールデンアカデミーの指導者が、それぞれサッカー部の指導にあたることを予定していましたが、7月の市総合体育大会が終わるまでは、3年生の心情等を考慮して休日の指導は顧問の教員が行うこととし、ゴールデンアカデミーの指導者がサポートする形をとりました。なお、第1回アンケート後、8月以降は休日の指導はゴールデンアカデミーの指導者が主として行っておりますことを申し添えます。24ページをご覧ください。生徒に、「ゴールデンアカデミーの指導についてどう思うか」と尋ねたところ、「よい」・「どちらかといえばよい」と答えた割合が67%でした。その理由として、「的確で良い指示をしてくれる」、「先生の負担をなくせて、自分も専門指導者に指導してもらい嬉しいから」、「先生とは別の視点で、部員の長所と短所をうまくいかしてくれている」などが挙げられており、顧問の先生の負担を気遣う意見や高い専門性に基づいた指導を受けられていることを喜ぶ声がありました。

次に保護者です。「休日の活動では、ゴールデンアカデミーの指導者が顧問の教員とともに指導に携わる体制を取っていることについてどう思うか」と尋ねたところ、「よい」・「どちらかといえばよい」と答えた割合が85%でした。その理由として、「充実した指導」の視点で見ると、「生徒を知っている先生と、サッカーの技術を分かっているコーチがいるとバランスが良い」、「先生以外の方々に指導してもらうことで、偏りのない指導が得られるから」、「技術的にしっかりしているから」等の意見がありました。「教員の負担軽減」の視点で見ると、「顧問の先生の負担が減るのであれば良い」、「休日は休んでいただきたい」、「先生の負担軽減につながることを期待できる」等の意見がありました。ゴールデンアカデミー指導者の高い指導力を期待しつつ、教員の負担軽減を願う声が多く感じられました。また、休日の部活動が地域クラブ活動として行われていることについて、「良い点」と「課題」について尋ねたところ、「良い点」については、「高い指導力」や「多様な指導者との関わり」、「教員の負担軽減」について期待の声がある一方、「課題」としては、「週1回の指導でどこまで部活動に関われるのか」、「試合の指揮をとるのが顧問の教員だとしたら、週末の練習の様子を見ずにどこまで指揮をとれるのか」、「指導者と選手との充実したコミュニケーション」などがありました。

次に顧問の教員です。地域の指導者とともに指導に当たる体制について、「負担」と感じていることがアンケートを通してわかりました。ゴールデンアカデミー指導者との連絡や、グラウンド割の作成が負担増と感じられていて、休日の指導の際も何をどこまでお願いしていいのかわからない状

況だったことが伺えます。また、「地域クラブとなると技術指導がメインとなり、生徒指導が行われるのか心配。学校の指導とクラブの指導に差が出ることで、学校の指導が入らなくなるのではないか」との懸念もありました。

最後にゴールデンアカデミーです。25ページをご覧ください。管理運営と指導運営の負担について、初年度は校内での練習指導のみという契約条件から、「どちらかといえば負担ではない」と回答しています。本事業の「良い点」と「課題」を合わせた意見として、「部活動を行う理由は生徒によって様々。シンプルにサッカー技術を高めたい生徒にとっては、プロの指導を受けることは大きな機会と捉えている。その一方で、本来中学生対象のクラブチームに入団するにはセレクションを受け、2万円前後の月謝がその指導や環境の対価として必要である。もし、セレクションなし且つ安価な月謝でプロの指導を受けられるということで、技術向上志向の選手がどんどん集まる状況になると、中学からサッカーを始めてみたい選手や、技術だけでなくスポーツを通して様々なことを学びたいと考えている選手との共存がむずかしくなるのではないかと考える。そのため志向性別のチームも含めた複数のチーム編成も考えると、1中学校内でのチームではなく、複数の中学校を横断するチームが必要となる」という意見をいただきました。

ここまで、滝の沢中学校と高浜中学校のモデル実証について、第1回アンケート調査からの報告から、「指導の充実」と「教員の負担軽減」を視点に考察してまいりました。

大きなまとめとして、「指導の充実」については、顧問の教員以外から専門的な指導を受けられることについて、生徒・保護者、教員から多くの肯定的な意見をいただいていると捉えております。さらに、種目の特性に着目してみると、陸上競技は個人種目が主であることから、顧問の教員だけでは指導しきれないところを地域の指導者がカバーできていることがわかります。一方、サッカーのような団体種目においては、ある程度一人の指導者で指導が成立できるところがあり、平日と休日で異なる指導者が連携して指導に当たることの難しさが改めて浮き彫りとなり、地域指導者との様々な調整等に負担を感じながら、どのようにすれば効果的な連携となっていくのかを模索していることが伺えます。「教員の負担軽減」については、特に保護者から「休日は休んでもらいたい」、「負担軽減につながることを期待できる」とした声をいただきました。しかし、別の視点では、みらい創造財団からの「移行の初期段階においては顧問の教員が休日の活動に関わることが生徒や保護者の安心感につながっていると捉えているので、初期段階に教員も地域クラブ指導者として関わる体制が、安定的なクラブ運営と、理解と協力を促進しながら地域移行していけることにつながるのではないか」というご意見を先ほどご紹介いたしました。休日の拠点校型の指導現場に、新たに地域の指導者に関わっていただくにあたっては、最初は顧問の教員にも指導現場にいてもらえることが、指導される側にとっても、指導する側にとっても、それぞれ安心して活動できる環境となる

と推察されます。そして、藤沢ＡＣからは、「近隣校と合同で行う」ことが活動場所の安定的確保や担い手確保といった課題の解消につながると意見をいただきました。先ほどご紹介したゴールデンアカデミーからの「志向性別のチームも含めた複数のチーム編成も考えると、１中学校内でのチームではなく、複数の中学校を横断するチームが必要となる」という意見もあることから、複数校を横断的に指導する体制が、活動場所の安定的確保や子どもの志向別活動の充実に有効とする意見は、拠点校型を進めていく理由の一つにつながるものと捉えております。

これらのことから、拠点校型をより円滑に進めていくにあたってのヒントとして、個人種目や、専門的な指導ができる教員の少ない種目は、滝の沢や高浜のような地域移行モデルを少しずつでも実現可能にしていくことが、そして、団体種目や専門的な指導ができる教員が多い種目は、外部指導者等の地域人材を拡充し、教員が指導しなくても成立する環境を整えていくことが、「指導の充実」と「教員の負担軽減」にそれぞれ有効なのではないかと、今回のモデル実証の途中経過から感じたところでございます。以上、今年度行っているモデル実証の経過報告です。

会 長：ただいま事務局から、改めて今年度取り組んでいる２つのモデル実証のアンケート調査から、分析した成果と課題について報告がありました。

第２回でもお示ししているところですが、改めて地域移行からスタートし、前回の審議会では、拠点校型に主軸が移ったというご説明がありました。

今回の報告では地域移行として、子どもたちや指導者等がどう考えているか見て取れたと思います。拠点校になったとしても同じような課題が生まれてくるかと思いますので、これから議論ができればと思います。

先ほどの説明にもありましたとおり、湘南台中学校吹奏楽部については８月２日にも報告がありましたが、運営主体として想定した保護者会と最終合意に至らなかったとのことでした。

今後も事務局からモデル実証の取り組みが、藤沢市の部活動の地域連携、そして将来的な部活動の地域移行に繋がっていくものになるか、成果と課題からの検証の場としたいとありました。今後も引き続き、アンケートは２回目を取るとのことですので、しっかりしたエビデンスが取れるのではないかなと思います。

まず、後半の議論にもつながる部分ではありますが、皆様から「こういったところは拠点校型であっても成果として出る」、あるいは「現場からするとわかりづらい」などご意見がございましたら挙手をお願いします。

委 員：質問させてください。子どもたちの回答の中で、滝の沢中の回答は「どちらかといえばよい」と「よい」を合わせて１００％でした。一方高浜の方は６７％でしたので、大きい違いがあるのですが、あまり良くないと感じた子どもたちの理由がもしわかれば、教えてほしいです。あわせて、休日の外部指導者の人数がわかれば教えてください。

事務局：ありがとうございます。１点目のご質問についてですが、高浜中学校のケースが先ほど申し上げたとおり、８月までは顧問の教員が３年生の心情を

考え、平日も休日も主たる指導を行っておりました。このことから、この時点でのアンケートでは、ゴールデンアカデミーの指導者にもっと指導してもらいたいという意見になったことが原因と考えられます。年末年始にかけてアンケートを実施するので、その際に中身が見えてくると推測しております。

続いて、指導者の人数です。藤沢 AC には 40 名ほどの人数が登録しており、関われる際は多くの方が携わっていただいているようです。先日現地の滝の沢中学校を訪問した際には、藤沢 AC から 2 名の指導者が来ておりました。長距離と短距離を見る形で役割分担をして指導しておりました。

ゴールデンアカデミーは基本的にはメイン指導者が 1 名、補助の方が 1 名と聞いております。

委員：指導者の年齢はわかりますでしょうか。

事務局：滝の沢中学校は 20～30 代の方が中心と聞いております。ゴールデンアカデミーは 30 代半ばの方が主で行っていると聞いております。

委員：指導者の人数の話がありましたが、多くの人数がかかわれることは素晴らしいと思います。ところが、当初始まった指導者が 1 名、補助者が 1 名に対し、謝礼や保険加入をするスキームとは異なってしまっています。責任領域に問題があるように感じます。これらが、藤沢 AC のアンケートの「予算が少ないことから長期的にみると担い手が少なくなる」につながっているのではないかと思います。指導者派遣型のスキームの中でも藤沢 AC とやったモデルケースの次のステップにつなげていかないと齟齬が生じてしまっています。方向性としてはいい方向に向かっているとは思いますが、制度に不安があるという意見を述べさせていただきます。

会長：10 名参加しても謝金は全員に出るわけではないということですよ。皆様好意的に出てきていただいて一緒に楽しんでいただいているということでしょうか。

事務局：そのとおりです。そこに甘えてはいけないとは理解しているのですが、事業が始まる前からボランティアとして滝の沢中学校と交流があったことから本モデル事業を始めたという経緯があります。委員ご指摘のとおり、事業の差異については、今後議論をしていく必要があると感じます。

委員：どちらの中学校においても、過半数に達していない回答者数なことは気になります。また、このような状況の中で回答した方からはいい意見が出やすいのかと思いますので、ニュートラルな意見になっているのか疑問です。次回はできれば過半数以上の回答数、特に生徒さんの意見が知りたいです。さらに学校の時間を使って回答するのが難しいのであれば、Google フォームに頼らず、紙で実施するなど回答数を伸ばすことができればいいと思います。好意的でない生徒の意見も聞けたらいいと思いました。

会長：ありがとうございます。アンケートをする方法について、どうやったら意見がもらえるのか事務局のほうで実際に子どもに意見を聞いてみるなどもあるでしょうし、検討してください。

委員：アンケートを受けての事務局の考え方が最後に示されたと思うのですが、

理解できませんでした。陸上競技のような個人種目が拠点校型に合っていて、団体種目の方が地域移行に合っているという説明でしたか。

事務局：個人種目等は専門的な指導ができる方たちが多く入ってくれないと、教員一人では全て教えきれないと思いますので、地域移行モデルが合うのではないかと考えております。団体種目は今のところ専門指導できる教員が多いということから、外部指導者等の地域人材を拡充する地域連携が合っているのではないかとこの見解をお伝えさせていただきました。

委員：逆の解釈をしておりました。わかりました。

会長：報告を受けて思ったことは、ほかの地域を見ていると、競技人口が少なく、指導者が少ないところは拠点校型で生徒が集まってそこで指導しているというケースが多々見受けられました。例えばサッカーは、競技人口も増えてきて指導者ライセンスも競技団体にされているので、このアンケートの中でもご自身の指導観があるようにも感じます。今のところ、藤沢市全体をみるとそれぞれの学校に指導できる人たちがいるという意味では、そんなに急いで学校の外に出すということは、あくまで私見ではありますが、タイムラグがあってもいいのではないかと感じております。ただ、現場ではどうであるかははっきりとはわかりませんので、第2回目のアンケートを含めて深掘りできればと思っています。

委員：このアンケートを読ませていただくと、うまくいきそうなことがかなり書かれてあります。本当にこのままの形で行けそうなのでしょうか。もう少し難しい課題というところを、洗い出さないと本当にこれでできてしまうのかということが不安です。1人の意見でもいいので、そういうことをいかにつぶしていくかが重要であるので、大丈夫だという雰囲気で行ってしまうのはまずいというように感じます。

事務局：まさにおっしゃる通りだと思います。7月に実施したものですので、ここまで好意的な意見をもらえなかったもので、本当に大丈夫なのかという視点を持つていく必要があることと、第2回のアンケートで課題をいただくか、またそれが何なのか、それをどういうふうに改善していくのかという視点がとても大事だと思っています。

会長：少し捕捉します。高浜中学校の先生が、本当にクラブに任せていいのか、グラウンド調整、指導観の違いなどコミュニケーションをとる必要がある部分がかかなり負担なのだろうと思います。ミスコミュニケーションが起きた際、誰がコーディネートしてうまく対処するのか、指導者がそっぽ向いた状態はよくないので、コーディネートをする人が、校長先生なのか、もしくは藤沢市みらい創造財団の方が受けてくださるのか、見えている課題は詰めていった方がいいと思います。

委員：滝の沢中学校と高浜中学校はいずれもスポーツ部門の実証なので、今回吹奏楽は合意に至らなかったということでしたが、今後文化芸術部門の実証は行われるのかお聞きしたいです。

事務局：運営主体として可能性があるものとして、国から例示された中に保護者会があったことから、運営主体を担っていただけるよう調整してまいりまし

た。保護者の方々からすると、学校から切り離すイメージが急には難しいというご意見をいただきました。どういう風な形で運営するという説明の資料や実際に使うであろう書類を一通り作って説明する等想定できることは可能な限りやってみたところではあります、なかなか運営主体を担うというところまでは、皆様からの合意形成がないと難しいことから、実施には至らなかったものです。

文化部門については、現在検討しているところでございます。本市の休日の文化活動の主となる吹奏楽部や合唱部の顧問の先生方と意見交換するような場を作り、どういう形であれば進めていけるかを意見交換しながら考えていきたいと考えております。

委員：運動部は具体的に少しずつ進んでいますが、文化芸術についてはストップしているように思うので、少しでも進めていってほしいと感じます。

会長：ありがとうございます。

委員：事務局に質問ですが、例えば今回合意に至らなかった湘南台中の形が、仮に市との間に管理運営団体が入っていたらどうなっていたと捉えられていますでしょうか。

事務局：断定はできかねますが、合意できていた可能性があるのではないかと思います。

委員：ありがとうございます。本校は器楽部があり、部活動指導員が配置されている上、保護者会にかなり支えていただいている状況にあります。なかなか保護者会にすべてを委ねる形は難しいとは思いますが、滝の沢中学校のような形であれば、可能性があるのかと考えられます。ほかの学校にもこのように保護者会に支えていただいているようなケースはあると思いますので、検討できるといいと思います。

副会長：事務局に質問です。管理団体の「管理業務がなにか」という点です。どこまで、なにをという線引きがあるのでしょうか。

事務局：一つは指導者が、配置されている点です。学校の部活動では、事故等が起きた際は教員が対応をし、校長からのお願いで顧問が指導に当たります。学校管理下であれば、休日の活動であれば管理運営団体が指導者を派遣するというすみわけです。あわせて安全管理を行うということです。

副会長：安全管理業務と指導者配置ということですね。では、例えば滝の沢中学校のケースで事故が起きたときは、藤沢 AC ではなく藤沢市みらい創造財団が緊急対応をするということでしょうか。

事務局：一義的には、現場で指導にあたっている指導者が判断をする必要があると考えます。なぜなら、緊急時にすべての判断を運営団体に諮っている、事故対応に間に合わないことが出てきてしまうためです。仕組み上は大きな判断をしないといけない際は、管理運営団体に連絡をすることとして検証しております。

会長：ありがとうございます。例えば藤沢 AC が指導や安全管理・応急処置等をしますが、不幸にも事故が起きたときは、一般的にどこの責任と考えますか。

事務局：今回は、本市が委託をしているものなので、受託をしている団体の責任となりますが、大きくとらえれば委託元は本市であることから、本市の責任も含まれると考えます。

副会長：この体制を整理しないと学校も指導者もわからないので、整理したほうがいいのではないかというシンプルな提案でした。

会 長：ありがとうございます。とても大事なところだと思います。私自身も大学生の体育の授業をよくやっている中で、いつもハラハラしながら実施しているところです。

湘南台中学校については、事務局から実施する前に説明を受けた際は、「思い切ったな」という感想を持ちました。すごく新しい発想だとは思いましたが、やはり保護者会の上に管理する団体を設置した方がいいという話はさせていただきました。まさに先ほど委員がおっしゃったような形であれば、やりたいという保護者もいるでしょうし、藤沢市の資源を使いながら、今後のモデルの一つとして、うまく活用できたらいいのではないかと個人的に思っております。他にございますか。

委 員：個人的にずっと気になっておりましたが、本日事務局の話を聞いて、湘南台中学校の受託に至らなかった理由が明確になった気がしました。会長がおっしゃっていたようにやりたい保護者がいるかどうかはわかりませんが、協力しようという保護者は沢山いると思います。保護者会の上にしつかりした団体があれば、保護者の方々は、先生方の負担を減らすため、また子どもたちのためであれば、協力しようとしてくれると思いますので、今後内容を詰めたほうがいいと思います。

また、当初だと来年度は20ケースという話でしたが、それをできるところから徐々に地域人材を配置することになったと説明いただきました。このあたり令和6年度以降どういう風に進んでいくのか、具体案などは挙がっておりますか。

事務局：現在予算要望中でございますので、明確なところは未定ですが、学校現場から情報提供いただいているものもありますし、今年度のものもありますので、次回お話しできればと思います。

委 員：湘南台中学校の件ですが、委員や会長がおっしゃるとおり、どこか別の団体を置けばうまくいったらというのには理解します。なぜなら、保護者が運営する良し悪しがあるからです。今回の中学校においては、「保護者会の会長は、部長の保護者になる」という決まりがあり、ご自分の意志とかかわらず会長になったということがあったと聞きましたし、また自分たちの代だけで大きな変更を決定してしまって、後に続く次の代の保護者にその負担を強いていいのかという懸念があって踏み切れなかったと聞いております。

もう一つ吹奏楽に限った課題として、金銭面があると思います。現状でも多くの指導者を招いていることから、モデル検証のような指導者謝礼の範疇ではとても運営ができないということです。また、楽器の運搬や演奏会出演のための経費等相当大きなお金を管理されているということで、そ

の辺の公費負担と受益者負担のことも一緒に考えないと、地域移行の実現は非常に難しいと感じます。

会 長：ありがとうございます。貴重な意見だと思います。

委 員：アンケート公表されておりますが、成果として、子どもたちが充実感と満足感を得られていれば当然陸上であれば速く、サッカーであれば強くなるということが、勝利至上主義でなくても成果にも繋がるのではないかと思います。このアンケートを取った時点ではまだまだわからないと思うのですが、その辺の成果が現れてくれば、他の地域でも、そういう形でやると子供たちも充実感を持って楽しくやって強くなるってということが、広がっていくのかなと思いますが、その辺の成果がどれくらいでているのかわかれば教えてほしいと思います。

事務局：結果に反映しているという視点ではとらえていないことから、情報は持ち合わせておりませんが、滝の沢中学校の生徒の表情をみていると地域指導者とのいい関係性が築けているという風に思いますし、顧問の先生のお話では、高校へ行っても陸上指導をつけてほしいという願いがあって、その下地を作っているような段階だとおっしゃっていました。そのようなことが本市の理念とも重なるのではないかと個人的には思います。

会 長：ありがとうございました。では、次に進めたいと思います。

事務局：19ページにお戻りいただけますでしょうか。さて、拠点校型を進めるにあたっての現状報告でございますが、11月6日の第3回推進協議会でご承認いただいた「藤沢市学校部活動の地域連携・地域移行の方向性及び計画」について、中学校校長会をはじめ、市中体連事務局、市体育協会など、学校現場や地域団体に対して方向性及び計画のご説明等を行いました。

その中で、特に令和6年度以降計画の主軸となる休日の「拠点校型学校部活動」制度の進め方や細かな調整等について、様々なご意見等をいただいております。

拙速な進め方とならぬよう、現場の先生方とよく話し合い、学校現場や地域団体等と十分な合意形成を図りながら、本取組が子どもたちにとっては「指導の充実」に、教員にとっては「負担軽減」にそれぞれつながっていくよう、慎重に進めていく必要があると考えております。

いただいた主なご意見等は、次の通りです。

「教員、生徒、保護者等への周知期間が十分ではない。」

「当該専門部からの意見等が拠点校型の運用に反映されるだけの十分な時間的余裕をもつべきではないか。」

「中体連主催大会の出場資格やユニフォーム等の諸条件について十分詰めてから進めていくのがよいのではないか。」

「拠点校型のメリットもある一方、デメリットについてどのように改善、解決策を示していけるのか不透明である。」

「教員の負担軽減どころか、地域移行まで教員が負担を引き受けることにならないか。」

「モデル実証の検証結果と、拠点校型の展開にどのように関連性を持たせ

られるのか。」

市教育委員会といたしましては、ご意見を受け止め、今後の進め方について慎重に検討していきたいと考えております。

また、本市の部活動地域移行の実現に向けた取組について、現場の先生方をはじめ、生徒と保護者には「モデル実証を行っている」という情報しかお伝えできていない状況もございますので、モデル実証の成果と課題を分析したものをあわせて、今後の本市の計画等をお伝えしたいと考えております。報告は以上です。

会 長：前回の協議会でも、部会長からも同じような意見が出て、それを踏まえまして、会長預かりで実際に「予定」という文言を入れさせていただきました。モデル実証の拡充から拠点校方に方針を転換した経緯について、そして前回の協議会で承認となった計画に対する現場からの意見や助言を踏まえて、進め方を見直している状況について、それぞれ説明がありました。ここから、各専門部会から報告をしていただいて協議に入りたいと思いますが、先に事務局からありますか。

事務局：「藤沢市方針」の今後の取り扱いについて、お詫びがございます。第3回推進協議会におきまして、「今後庁内関係各課に本方針（案）の照会をかけ、文言等をより精査し、来年6月議会に提出する旨をお伝えいたしました。その中で、庁内関係各課からは、私たち市教育委員会だけでは気づけなかった事なども多数ご指摘いただいているところでございます。これまで市教育委員会が主導して方針（案）の準備と、推進協議会の皆様へのお諮り等を進めてまいりましたが、本来は庁内関係各課との調整を先に行うべきでございました。事務局の不手際により、推進協議会と検討専門部会の皆様をはじめ、庁内関係各課にご迷惑をおかけしたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。本方針案の取り扱いも訂正が重なったことを含め、大変申し訳ありませんでした。事務局からは以上でございます。

会 長：ありがとうございます。 次第の4、「各検討専門部会からの協議報告」について、事務局より説明を求めたいと思います。

事務局：11月6日の第3回推進協議会以降、4つの検討専門部会をそれぞれ2回ずつ開催いたしました。

それぞれ第3回の検討専門部会では「藤沢市学校部活動の地域連携・地域移行の方向性及び計画」の報告を受けての質疑応答や意見交換等をいたしました。第4回の各検討専門部会では、それぞれ協議テーマを設定し、そのことについて協議を行いました。委員の皆様、ここで次第をご覧ください。共通協議テーマとして、「モデル実証の成果と課題から、拠点校型学校部活動が持続可能なスポーツ・文化芸術環境の土台となるためには」を設けさせていただきました。これから、各部会長より協議からの報告をしていただきますが、本日は報告を受けてのご意見や、共通協議テーマに向けたご協議をしていただき、どうしたら本市の地域連携・地域移行の取り組みが良い方向に行くのか、後押しをいただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

会長：ただいま事務局からの説明にありましたが、各部会長からの報告後に、報告を受けてのご意見や、共通協議テーマに向けたご協議を通して、藤沢市の地域連携・地域移行の取り組みが少しでも良い方向に行くために、それぞれ所属されている団体のお立場やこれまでの知見を活かして、積極的なご協議、意見交換をお願いします。

それでは、次第の順番に沿って、各検討専門部会長より協議の報告をお願いいたします。

最初に「地域指導団体検討専門部会」の報告を、部会長からお願いします。

部会長：それでは、地域指導団体検討専門部会の報告をいたします。資料の26ページ～30ページをご覧ください。本専門部会は、11月13日、12月4日の2回開催いたしました。参加した関係者は資料に記載の通りです。主に受け皿となりうる団体からのメンバーで協議を重ねてまいりました。

それでは、協議内容について報告します。本検討専門部会では「地域移行を見据え、地域人材や地域指導団体をすべての学校部活動に配置していくにあたっての課題と実現について考える」をテーマに、様々な意見交換を行いました。テーマはありましたが、ざっくばらんにいろんな話をしながら、それぞれが持つ知見を掛け合わせるような話をさせていただきました。

それでは、28ページをご覧ください。「拠点校型学校部活動について」共有させていただいたところ、総合型地域スポーツクラブの代表の方からは、「他市では取り組みが進んでいかないうちで、本市では拠点校型学校部活動として進めることをお示しいただき、それは本市の学校の先生方が部活動を指導したいという気持ちの表れであり、それ自体が誇らしいこと、藤沢らしさで、藤沢のよさが出ている」というご意見をいただきました。

あとは、拠点校型学校部活動を実施するとともに、人材の確保について拠点校型がゴールではなく、地域連携・地域移行に繋がるように、同時に指導者を確保しなきゃいけないという話になりました。人材確保については、教員以外の人材確保も必須であるという話にもなりました。また、指導者確保と言っても、どのような指導者で、何をすればいいのかということも、基準として明確に持たなきゃいけないという話題も出ています。

技術力のあるプロの指導者を求めるとそれだけ必要なお金がかかります。人・物・金ではないですけど、そのお金をどう負担していくのかというところで、受益者負担の話も出ました。部活動とビジネスを繋げるのはどうなのかなという反対意見もあるかと思いますが、民間の方をお願いしてお金を生むような仕組み作りをすればお金を捻出できるのではないかという話も出ています。

今の我々の社会の中には、スポーツをするのにあまりお金はかからないっていう感覚を持っていますが、実際はスポーツをするには指導者がいて場所があるというところで、お金を支払うものという感覚を持つようなマインドチェンジが必要なんじゃないかという意見もでております。

あとは、大きな仕組みを変える中で、保護者や地域住民の方にどうアプ

ローチしていくかというところが一つの鍵になるのではないかというのが出てきました。例えばある学校のジャージを着て、コンビニで何かをしている生徒がいれば、その連絡を学校にいただくことは多くあります。しかし、今後、部活を地域に広げていくと際、学校にありがたいお叱りの連絡をいただくことも大事ではありますが、「地域で子どもを育てる」ということは地域移行の一つの主題でもありますので、地域で子どもを育てていこうというところをいろんな場面でメッセージとして出していただけるとありがたいというお話も出ました。

体育協会さんからは今後大会運営を体育協会加盟団体に丸投げという形であれば負担になり立ち行かなくなってしまうけれども、教員や今ある形とプラスして共にという意味では、形としてはありうるのではないかと思いますのでご意見をいただきました。

本中体連常任理事の中でも肯定的な意見も多数ではありますが、ネガティブな意見もあるのが現状です。やったことがないことをやることはなかなか難しく引け目を感じているというような様子でした、どうすればできるようになるかという視点で、トライアンドエラーで進めていきたいです。報告は以上です。

会 長：ご報告ありがとうございました。質問のある方もいらっしゃると思いますが、4つの部会報告が終わった後、協議と合わせてお受けしたいと思います。次に、指導者の質と研修に関する検討専門部会の報告を、部会長からお願いします。

部会長：本部会につきましては11月15日と12月6日にそれぞれ行いました。参加しました関係者につきましては31ページ32ページの記載の通りでございます。また本日参考資料といたしまして35ページのところで先ほどの方針案についてちょっとお話がありましたが、この間まとめた方針の案にこの指導者に関する記述があるところの抜粋を載せていただきました。合わせて、藤沢市みらい創造財団が実際に研修を行っている内容につきまして資料提供をお願いいたしまして、その資料を33ページに掲載させていただきました。

この検討部会では地域移行を見据えて、学校部活動に新たな地域人材を指導者として入ってくるにあたって必要とされる資質と役割について意見交換を考えるということをテーマに、様々な意見を述べ合うことにいたしました。

33ページに記載の「財団からの提供資料について」をご覧ください。ここについては、ある程度研修についてこういう枠の研修を行った方がいいのではないか、実際に行われているものなので参考になるのではないかと、ということで資料提供いただき、財団の方からも説明をいただきました。キーワードや大枠だけご説明いたします。

安全管理についての研修を指導者に対して行っているそうです。例えばAEDの使い方、熱中症予防など学校の中に含まれている救急法、応急手当についてもこの中で行われているそうです。二つ目がコンプライアンス研

修ということで、いわゆる体罰・ハラスメント防止し、安心安全にその練習活動が行われるための説明だそうです。会の中で意見を述べましたが、学校で指導者研修を行う場合には、安全管理も大事ではありますが、コンプライアンス研修の方に重点が置かれがちなので、最初に安全管理が入るのはどうだろうなというところで参加者からのご意見をいただきました。

続いて指導に関わる基本方針というところで、指導研修を行うにあたって、参加した受講者が満足感を得られるように考えていく必要があるということが述べられています。

最後に開催時におけるリスク管理ですが、それぞれ行う事業について、例えば指導者が立つ位置はどこが適当なのか等、そういうことも含めた細かい部分も研修で示しているとのことでした。

34ページをご覧ください。指導者の質や研修に関する検討専門部会から第4回推進協議会への申し送りというところです。これまでの議論してきた内容についてお話させていただきます。大きな方向性としては実は一番話が盛り上がったのは、④・⑤でございます。取り組んでいる種目が好きで、長く続けていけるようになってほしいという思いで、こうなったら駄目だという話も含めて協議しました。例えば日本一になったとしても、もう競技をやりたくありませんということでは意味がないので、その競技が好きで、大人になってテレビつけて競技がやられていたら観たり会話をしたりできたらいいいというような話を最後にしたら心が晴れ晴れしました。そういうふうに指導したい、指導者にもそういうマインドを持って子どもたちと接してほしいというところを共有しました。

中学校部活動は、体験の入り口なので習慣を通して、やはり自己実現・自己肯定感を持ち、上手い下手に関わらずこの競技や文化活動を通して救われている子どもが沢山いるのは現場で見えています。それを目標にスタートして、指導者の質についてもそこを目指してほしいと思います。競技が好きな生徒をたくさん作って、指導者も競技が好きで教えているというベースになるような指導者を求めたいなというお話をしました。

続いて、①から③まで述べさせていただきます。一つ目は協議事項に偏らない、好きっていうところを大事にしたような基本の指導をし、あとは子どもの自主性やコミュニケーションを大事にしてやっていただきたいというところです。

二つ目は、安全管理の研修・資質についてです。三つ目がコンプライアンスについてです。例えば、個人情報取り扱い、もちろん体罰・言葉遣い等、体に触って指導をしていいのかとか、微妙なところは中学校段階ではあります。このような問題は今なお起こっています。新たに中学校現場指導に当たる場合には、そういう発達段階にいるということ、指導の一環で触れて教える等もしてはならないということまで気をつけなきゃいけないというところは項目として挙げておくべきと思いました。

あとは信頼関係というところで、指導者の質としてはとても大事で、やっぱり子供たちと信頼関係を築いた上での指導というところを意識してい

ただきたいなと思いました。

あと①に関わるのところでは、ハラスメント禁止という大枠でくくってしまうと「それはしません」というお答えを誰もがすると思います。そのため、具体的に「こういう場面ではこういう風に思われるので、こうしないと駄目」のようにいわゆるケーススタディのような形で、具体的な場面を示して研修をするというところが意見として出ました。

②は喜びが与えられるような指導、基本的な指導、③はそれぞれ学ぶ姿勢もそうですが、生徒それぞれの特性があります。例えば LGBTQ です。配慮の必要もありますので、知った上で、工夫をしてみんなで乗り切るような臨機応変さも持ち合わせていただきたいというところが最後に出てきました。

先ほど言ったように競技を好きという子どもをいかに育てるのかというところは、その競技が好きな人でないといけないと思いますので、そういうところを大事にした人格重視の指導者育成をしていただければなと思っています。報告は以上です。

会 長：ご報告ありがとうございました。次に、大会運営検討専門部会の報告ですが、笹原部会長が本日ご欠席ですので、代わりに事務局から報告をお願いします。

事務局：それでは笹原部会長に代わりまして、大会運営検討専門部会の報告をいたします。資料の41ページ～44ページをご覧ください。本専門部会は、11月20日、12月12日の2回開催いたしました。参加した関係者は資料に記載の通りです。本検討専門部会では「地域移行を見据え、教員に頼らない大会の在り方を考える」をテーマに、様々な意見交換を行いました。その中で特に推進協議会に申し送りとしたいことは、次のとおりです。教員に頼らない大会の在り方を考える上で、「誰に委ねていくのか」という視点から意見交換をしました。体育協会や民間事業者等に委ねるとした時の現状や課題を共有しました。

まず、42ページの体育協会に関するお話です。関係者の方から、まだまだ地域移行によって大会の主催をしていくことが、対岸の火事のような感覚もあり、中体連に任せている部分があり不安が大きいという話がありました。

中体連と種目協会の連携は必須であると捉えているが、中体連は人材不足の大きな問題で、課題だということが話題に上がりました。

続いて43ページをご覧ください。例えば総合型スポーツクラブ等地域クラブが大会運営を担うことは考えられるのではないかとということがありました。中体連が主催していくにしても、可能であれば外部指導者、部活動指導員等を増やしていった教員の負担を減らしていくことが現実的な手法としては一番考えられるのではないかとこの話になりましたが、これも抜本的な解決にはならないということも話題になりました。

先ほど申し上げた体育協会でも、後継者を含めた人材不足が課題になっている話や、総合型地域スポーツクラブにおいても同じ課題があるという

ことがわかりました。

また、教員の負担を減らそうと思っても、外部指導者等を導入するための財源確保の課題が大きな壁となっているという話になりました。

今回は合唱と吹奏楽の関係の方がいらっしゃったので、その辺もお話を伺いました。

コンクールの当日等に受付・誘導等非常に多くの人が参加するからこそ、たくさんの運営人員が必要になるものの、説明会を開く、要綱を作る等中核を担う方は数名で、当日の受付や誘導等といった運営業務は高校生が参加しているコンクールであれば高校生たちと一緒にやっているという状況を教えていただきました。合唱や吹奏楽の事例を聞くと、教員に全て頼らなくても高校生等と一緒にできることがあるのだと参考になりました。

スポンサーについて話題になりました。金銭について企業から出しているのはなかなか難しそうであり、様々な条件等を整理する必要があるという話をしました。しかし、お金がかかるからといって全て受益者負担にするというのは現実的ではないことから、例えば企業協賛やクラウドファンディング等で、安定した財源確保に繋げることにはできるのではないかというご意見もありました。

最後に、大会に係る教員の負担軽減を考える中で、教員が引率をしないでも成立する大会参加や大会運営の体制作りを進めていくことと、そのことについて保護者の理解も得て促進していくことが必要であるということを示し上げます。報告は以上でございます。

会 長：ご報告ありがとうございました。最後に、諸条件検討専門部会の部会長から報告をお願いします。

部会長：それでは、諸条件検討専門部会の報告をいたします。資料の45ページ～48ページをご覧ください。本専門部会は、11月22日、12月13日の2回開催いたしました。参加した関係者は資料に記載の通りです。本検討専門部会では「学校部活動のダウンサイジングを考える」をテーマに、様々な意見交換を行いました。

46ページの要点記録をご覧ください。生涯に亘ってスポーツ・文化活動を楽しめるということが本部会でも話題になりました。エンジョイ志向を主軸に置くということが必要ではないかという意見も出ました。現在ある部活動を集約化することでダウンサイジングを図る際も、ニーズに応じた部活動が必要になると思います。

拠点校型学校部活動を市内全体で取り組むということなので、藤沢市としての基本的な考え方やあり方を設定していくべきなのではないかという意見が出ました。複数の顧問が集まって、どのようにやっていくかという方針がそこで決まるのではなく、藤沢市としてのルールや考え方を事前に設定すべきということです。考え方としては、大会上位成績を追求するのではなく、基本的にはエンジョイ志向・健康志向、将来にわたって楽しむことができるような子どもたちを育てる、競技志向のチームは別のクラブ等でやってもらうという考え方でもいいのではないかという意見も出ま

した。

続いて47ページをご覧ください。兼職兼業制度や指導者についてですが、拠点校で行う部活動の間は教員の身分として指導をするとのことですが、部活動は必ずしも教員が担う業務ではなく、また部活動を優先したことでその他の業務や他の職員にしわ寄せがいつてしまうこともあることから、やはり教員の部活動の指導については、整理する必要があるという意見が出ました。

兼職兼業制度の形を、拠点校型学校部活動を行う上でも選択ができたり、相当の報酬を与えたりということはするべきなのではないかという意見も出ました。また、教員の負担軽減のためには更なる地域指導者の確保が必須で、持続可能性を考慮すると複数指導体制が必要で、そうなった場合、報酬・謝礼は必要だろうと思います。いくらボランティアの気持ちで携わってくれたとしても、無償で依頼するわけにはいかないと思います。

教員の兼職兼業制度の方にも、地域の指導者の方にも、相当の報酬を支払う場合、公費負担とすることが難しいのであれば、受益者負担をどの時点でお願ひできるのかという意見も含めて、推進協議会でも議論できたらいいのではないかという話が出ました。

また文化部について46ページをご覧ください。公民館活動等の地域のサークルが学校に来て体験活動をしたという報告がありました。その体験の形が部活動の地域移行として続いていくのではないかという情報提供で、この形であれば財源がなくても地域の方と一緒にいろんな活動を楽しむことができる上、指導者という考え方ではなく、地域の一員として地域のサークルに老若男女問わず一緒に楽しむこともできることから、試験的に行ってもいいのではないかという話題になりました。報告は以上です。

会 長：改めまして部会長の皆様。それぞれの検討専門部会での協議とその報告をありがとうございました。

それでは、ここから協議といたします。今年度藤沢市が取り組んでいるモデル実証の検証と、4つの検討専門部会の報告から、メインテーマ「モデル実証の成果と課題から、拠点校型学校部活動が持続可能なスポーツ・文化芸術環境の土台となるためには」について議論していただき、ご報告いただきました。

藤沢モデルの理念となるような「生涯に亘って、スポーツや文化活動が好きでいられる生徒を育てる環境を作りたい」という報告について、大きくうなずいている方が多かったと思います。非常に重要な議論かと思えます。この辺りを含めまして、ご意見や意見をいただきたいのですが、いかがでしょうか。

委 員：拠点校型学校部活動が方針として示されていたかと思えます。これから先、少子化の流れの中で、現在19校ある学校数がどれだけ少なくなるのかというと、それは考えにくいと思います。ただし、生徒の数が将来的には減少していくことはわかっている中で、今回野球とソフトボールについて進めるという方向性が示されましたが、そういうやり方よりも既に部活動が

成り立っていない学校や競技に着目し、拠点校型を進めてみるのがよいのではないのでしょうか。そういった拠点校型を進める中で、成果を残していった、その成果の上でそのほかの種目について、拠点校型に移行することのメリットを示していきながら共通理解を得るということが自然の流れではないかと思っています。わたくしの知る範囲でいえば、女子サッカー部は湘洋中学校しかないですが、小学校世代で女子の選手が男子の選手に混ざって活動をしている子はたくさんいます。今まではその子たちの受け皿がなかったことが課題であり、他市に流れていく傾向があったと思います。そういう意味ではそういうところから拠点校型を始めると、現在指導している学校の先生や地域の指導者たちもそういうことがないと成り立っていないことを承知していただいている形なのでうまくいくのではないかと思います。確かに批判めいたこともあるかと思うんですけども、やってみて成果を出すということが最大ではないかと私は思います。

会 長：大変貴重なご意見ありがとうございます。専門的な立場からのご意見等ありますでしょうか。中学校の先生からは今のご意見をお聞きになり、どう感じられますか。

委 員：湘洋中学校の女子サッカー部の話がありましたが、高浜中学校のラグビー部についても、19校あるうち唯一の部であります。実際に既に活動しているという意味では、バリアが少ない状態でスタートできそうだと思います。

委 員：女子サッカー部については、他の学校の生徒も来ていることから、そういう意味では拠点校型となっています。また、スポーツ少年団の指導者が外部指導者として、平日も休日も指導に入っていたっており、教員と連携しながら行っています。ほとんどの子が同じスポーツ少年団の女子サッカー出身なので、その少年団の合宿に「ジュニアリーダー」のような形で参加もしていますので、既に地域移行ができているようにも思います。拠点校かつ地域移行しているという実績があると言えますと思います。また、女子サッカー部のいい点は、中体連大会ではなく、サッカー協会主催の大会に参加ということから、地域移行も実現しやすい状況です。運営のモデルになるかと思っています。

会 長：ありがとうございます。実績も含めまして、おそらく、現場の先生は十分ご存知だと思いますが、実際にそのように運営されているということ自体は我々はわからないことから、地元でそのような形でできているということは最近事務局から聞いてはいたんですけど、ロールモデルを作っていくということはとても大事であると感じました。

参考ですが、秦野市は藤沢市と同じような考え方で、競技種目として器械体操と剣道を拠点校型にすることで進めているようです。しかし、なかなか指導者がいない状況であるそうです。剣道については、いろいろな道場があるので、そういった指導者の方が、来ていただいて実施するという事例があります。委員がおっしゃったような専門的な種目で、指導者が少ない状況の種目は、もしかしたら拠点校として、非常に進みやすくなるの

かもしれません。ありがとうございます。その他ご意見いかがでしょうか。

委員：今の意見に概ね賛成です。ロールモデル、課題を解決しているという点を周知しながら地域展開をすることが大切だと思います。藤沢には13地区あり、ほかの事業においてもそのような展開の仕方はよくやっています。ある学校でうまくいったから他の学校でも実施してみる等という進め方はとてもいいのではないかと感じました。ただ、どうしても、教職員の皆さんの声が大きく聞こえてしまうように感じます。「生徒の課題が解決した」というケースがぜひとも見たいです。

私は普段NPOや市民活動の支援を行っているのですが、少ないとは言いながらも情熱を持って地域活動に取り組んでいらっしゃる方がいらっしゃいます。藤沢会場のオリンピック・パラリンピックで多くのボランティアが参加した実績もありますので、そういった方々には、「生徒がこうなったらいいな」とか、「こういうふうになったからやりたい活動ができた」という声が地域に届くと、「それを応援したい、それに私も力を貸したい」という方が出てくるかなと思います。今すぐの話ではないかもしれませんが、そういった声が地域に届くように、まずは小さなケースを積み重ねていって、生徒の笑顔や充実した姿が写真や動画等で地域の方がみられる結果が出てくるとよいです。

今だとどうしても〇〇中学校サッカー部が全国大会に出ましたとか、プラスバンドの横断幕を駅前や学校で見るとかでしか地域の方々が生徒の活動を知る機会がないので、生徒の活動の姿が見えるようになってくると、地域移行周知PRが少ないというところも解決できるのではないかと思います。

会長：ありがとうございます。とっても大事な点だと思います。その他いかがでしょうか。

委員：「社会で子供を育てる」というご意見が出ましたので申し上げます。三者連携や、コミュニティスクールも始まりましたので、先生と会う機会が多いです。そこで感じるのは、子供を育てるには大人に心の余裕がないと駄目だなとも思っています。大人に余裕があって笑っていられるということでないといけないと思います。教職員の負担軽減は先生が笑っていらなくなる、心に余裕がなくなるからということから考えられたことだと思います。先生方に部活動の顧問になってもらうことをお願いをするときは、時間の提供も必要ですので、忙しいことによる不満が出るのは当たり前だと思います。例えば、子供の活動に熱量を出したい先生がいれば、そうではない先生もいる可能性があるように、地域移行をするにしても、先生方のご協力がないとうまく進んでいかないという現状であれば、対価がもらえれば頑張れるという意見が多いのであれば、お金のことを考えなければいけないし、対価はいらないという先生がいるのであればどこにどれぐらいいるのかをデータとして、どのくらいご協力していただけるかという根拠を取らなければいけないと思います。やはりスムーズに進めていくには、どのぐらいの協力がどこに力を入れてやっていけばできるのかと感

じました。

会 長：ありがとうございます。今、本当に全体をふんわりと議論しているというところだと思うのですが、優先順位をつけていくべきだというご意見だと捉えました。

この中で「引率」について、以前も議論になったかと思うのですが、例えば5つ大会引率が必要な大会があった際、そのうちの1つや2つと試しに引率をやめてみる等、段階的に「引率はやめていきましょう」ということを始めるだけでも、先生方の負担は減るのかと思います。今、気持ち的にも負担があるけれども、誰も何もしてくれない状況に光を差すような実践的なことが可能なのかなと私は常に思っております。仮にそうなった場合、これも生徒の社会的自立を求めるために実施すると踏み切った際、当たり前のようにクレームが入ると思うのですが、そういったことも含めたとしても、段階的に引率をやめていくことがあってもいいのではないかと思います。そのあたり先生方はいかがでしょう。

委 員：はい。中学校の大会運営等では中体連が仕切ることが多く、市の中体連の上には湘南の中体連があり、更に上に県の中体連があり、関東があり、全中があるという組織です。引率をつけなくてはならないという大会においては、なかなかすぐには難しいとは思いますが、例えば協会主催・開催の大会や練習試合は、市内であれば引率をつけないでやっているような部活動もございますので、一律でつけないって言っていただけると、負担もそうですし、意味や趣旨が伝われば保護者の皆様も不満はおっしゃられないと思いますが、どこで誰が声を出すかというところは難しいという話は中体連会長と話をしているところです。

委 員：行き帰りの道中を引率するのか、大会に出るための監督や指導者が必要なものの引率なのかどちらの話ですか。

委 員：行き帰りの道中のことです。

副会長：それは責任問題を問われる可能性が大きいから消極的になるということですね。先ほど今の議論にも関連しますし、先ほどの指導者にとって必要な研修とかそういった内容にも関連するのですが、学校の運動部活動に付随する業務が何かという内訳がすごくアバウトに語られていると思います。実際の技術指導もあれば、安全管理、生徒指導、鍵の開け閉めや運営業務、引率といった様々ある業務を整理して、これは先生がやるべきだとか、これは地域技術指導でこの人がやるべきだとか、例えばこれはボランティアで誰かがやれる方にさせていただくだとか、そういった整理をした方が、どこを移行させるかという議論がスムーズになるかと思います。

学校の運動部活動の拘束時間のデータを見ても、休日は2時間等拘束されているわけです。技術指導できない先生は安全管理のためにいるわけです。そうするとそれは、グラウンドに1人ボランティア等を配置することで安全管理を行えれば、多くの先生がそこにいて安全管理をするという業務が必要なくなるのではないのでしょうか。業務の整理をやった方がいいと思います。最近、そういった研究をやろうかなというふうに思っているの

で、学校の先生方のご協力がいただければ幸いです。

委員：今の意見について申し上げます。現場のある教員から出た生の意見で、副会長からおっしゃっていただいたように、普段の例えば平日の部活動は、例えばグラウンドに1人、体育館に1人誰か雇って配置すればいいのではという意見は現場からもありました。その方が全ての安全管理を担って、部活動は自主的な活動なのだから、生徒たちが自分たちで計画する等して活動して、何か危ないことがあればその方が安全管理上のことをやればいいのではないかとということです。地域移行として、わざわざ地域にすべてを持っていくということではないだろうというような意見もやはりありましたので、すごくいい考えなのかなと思います。保護者会等で、「何で先生は平日にもっと見てくれないのですか」とよく言われます。ほかの仕事はしなくてよく、部活を見る時間が自由にあるのであれば正直見たいです。しかし、今は業務量が半端ではなく、部活動を長時間見ていると帰るのは本当に遅くなってしまいます。教員の中には家庭にお子さんがいらっしゃる方も多くおり、そういう状況では家庭が回らなくなってしまいます。しかし、そういう状況でも教えたい教員もたくさんいるでしょうから、指導をできるときは指導するという形に活動そのものになっていけば、なぜ先生が来てくれないのかというご不満がなくなっていくますし、そもそもとして先生が来てくれないことに不満を持つこと自体が間違いだという方向性になっていくのだと思います。

そういった意味ではやはり、競技志向ではなく生涯スポーツにつなげることを考えて、長く続けていただけるようなスポーツの入口を中学校の段階で考えるのがいいのだと思います。

また、引率の件ですが、道中もそうですが、そこは責任というよりもやはり時間的なところが気になってしまいます。生徒と一緒に電車で行くとなると、例えば自分は5時に家を出て待ち合わせ場所に着いていなくてはならず、そこから引率をして大会等が終わり17時頃また解散場所まで戻ってきて、帰宅できるのが19時頃ということがあるように、拘束時間がとても長いです。自分でそのまま車等で行っていいのであれば少しですが時間は取れるので、プライベートが多くなるわけです。教員も「休日」とあるというところをもうちょっと理解していただいてもいいのかなという思いはいつもあります。正直なところ、お金が全てではないとは思いますが、休日にどれだけやっても対価は2700円程度なわけです。自分は教員になりたいくてなり、今後もやりたいと思っているからまだいいのですが、家族が一般職だった場合、対価もない長時間拘束される勤務体系というのは中々理解されません。まず、一般の方々には部活動をみているのにお金がでていないということにびっくりされます。一般企業であれば休日手当も出るのです。やはり今後、理解がない人たちの方が増えていくと私は思います。そういう理不尽なことに耐えられないような人たちがどんどん多くなっていくのかなと思うので、持続可能ということを考えると、諸条件のことを最初にやらないといけないうのかなと思います。

会 長：生の声を聞かせていただきありがとうございます。部活動も先生方のご好意で、成り立っているところが多いと思いますし、先生方が嫌にならないうちに何とかしないといけないと感じております。副会長からご提案がありました今日は、管理運営の役割と、先生方の実際の役割の整理をすることで次の議論も進むと思います。

時間も超過しておりますので、どうしてもこの場でこれだけは言っておきたいという方いらっしゃいましたらお願いします。

委 員：少し気になったところですが、先ほどの女子サッカー部の話を伺って、外部指導者の方が既に入っている部活がいろんな競技であると思います。それがどれぐらいあって、どういう関わり方をしているかを整理した方がいいのと思いました。休日のみ指導している例もあれば、平日から指導している例もあると思います。どういう取り組みをしているのかは興味がありますので、1回整理することでヒントになることがあるかと思いました。

会 長：ありがとうございます。事務局で非常に大変だとは思のですが、実態をしっかり見るという意味で整理が様々な必要かと感じます。

では、本日も進行と協議にご協力いただきましてありがとうございます。もっと議論したところではございますが、お時間の関係で申し訳ありません。それでは進行事務局の方に戻したいと思いますお願いします。

事務局：委員の皆様長時間ありがとうございました。本協議会は、次回が今年度最後となります。本日の共通協議テーマ「モデル実証の成果と課題から、拠点校型学校部活動が持続可能なスポーツ・文化芸術環境の土台となるためには」を軸に、令和6年度の本市の取組に向けた申し送りをご協議いただくまとめの会としたいと考えております。日時は2024年3月6日（水）15時～17時、場所は市役所本庁舎8-1・8-2会議室を予定しております。内容は、国・県の動向について・令和5年度モデル実証の報告（第2回アンケートから）、本市小学校・特別支援学校教員向けアンケート報告、本市小学校6年生とその保護者向けアンケート報告・協議「令和6年度の藤沢市部活動地域移行推進協議会への申し送り」などを予定しております。では最後に副会長から閉会のご挨拶をよろしくお願いします。

副会長：皆さん活発な議論ありがとうございました。これまでの議論を聞いていると、生徒の取り組みは全ての成果を図ること、教職員の方々の負担軽減をどう考えるのか、地域移行に係る基本的なことを定めること、各専門部会それぞれ出してくれる個別具体的なテクニカルな問題を同時に整理し始めている状況なのかと思います。今後このモデル期間で、いかに改善点や具体的な方法について前向きな議論にしていきたいと思いますので、引き続き皆様のご協力をいただきたいと思います。事務局も仕上げるが増えた状況になりましたが、ご協力をどうぞよろしくお願いします。本日はありがとうございました。

事務局：それでは第4回推進協議会を終了させていただきます。ありがとうございました。